

## アドラー心理学とフロイト心理学のエピソード分析法

野田俊作（大阪）

要旨；

The Adlerian and Freudian Methods of Episode Analysis

I analyzed a myth from "Kojiki", a Japanese ancient chronicle, and compared the result with a Freudian analysis by Osamu Kitayama. Adlerian method is characterized by analyzing the context of sentences with the idiographic and logical methodology, while Freudian method is based on the nomothetic and associative attitude neglecting the context. Adlerian method is more suitable to avoid the contamination of analyzer's lifestyle and more useful to help patients to understand themselves.

La Adlerana kaj Freudana Metodoj por Analizo de la Episodo.

Mi analizis miton el "Koihiki", japana malnova kroniko, kaj konparis la rezulton kun Freudana analizo de Osamu Kitayama. Adlerana metodo karakterizas sin kun analizi la kuntekston de frazoj kun la idiografika kaj logika metodologio, dum Freudana metodo bazighas sur la nomoteza kaj asocia sintenado, neglektante la kunteksto. Adlerana metodo tawgas plie por eviti la makulon de la vivstilo de analizanto kaj utilas plie por helpi tion, ke malsanuloj komprenas sin.

キーワード：

はじめに

早期回想や夢などのエピソードからライフスタイルを推量する方法を『エピソード分析 episode analysis』とよぶことにする。エピソード分析は、アドラー心理学だけではなく、フロイトやユングの系統の心理学でもさかんにおこなわれる。今回は、神話を題材としてとりあげて、アドラー心理学とフロイト心理学のエピソード分析の方法の違いを研究してみたい。神話をとりあげたのは、個人のエピソードとは違って、共通のテキストをもとに分析できるため、比較が容易だからである。

フロイト派の北山修が、著書『悲劇の発生論』の中で、『古事記』の中の、イザナギのミコトが死んだ妻のイザナミのミコトに会うために黄泉国（ヨミノクニ）へ行っただけを分析している。そこで、この物語を題材としてとりあげて、北山によるフロイト心理学的分析法と比較しつ

つ、アドラー心理学のエピソード分析法の特質について考えてみたい。

## イザナギの黄泉国訪問の物語

『古事記』の中の物語を、ほぼ逐語的に現代語訳しておく。原典は倉野憲司校注の岩波文庫本である<sup>[1]</sup>。

1. そこで〔イザナギは〕、その妻イザナミを相見ようと思って、黄泉国に追って往った。そこで〔イザナミが黄泉国の〕宮殿の閉ざされた戸口から出迎えたとき、イザナギが語っておっしゃるには、「いとしいわが妻のミコトよ、私とお前とが作っている国は、まだ作りおえていない。だから、帰ろうではないか」とおっしゃった。

そこでイザナミが答えて申すには、「悔しいこと、早くおいでにならなくて。私は黄泉国で調理した食物を食べてしまいました。でも、いとしいわが夫のミコトが〔黄泉国に〕入ってきてくださったのはありがたいことです。ですから、帰ろうと思いますので、しばらく黄泉国の神と交渉してみます。〔その間〕私をご覧になりませんように」と申した。こう申して、その宮殿の内に戻っていった時間がとても長かったので、〔イザナギは〕待つことができなかった。そこで左のミズラ（結髪）にさしていた大きな櫛の端の太い歯を取り折って、小さな火をともして〔宮殿の〕中を覗き見すると、〔イザナミは〕ウジがたかっとうごめき、頭には大イカツチがおり、胸には火イカツチがおり、腹には黒イカツチがおり、陰部には割きイカツチがおり、左手には若イカツチがおり、右手には土イカツチがおり、左足には鳴りイカツチがおり、右足には伏しイカツチがおり、あわせて八柱の雷神が生まれていた。

2. そこでイザナギは、見て恐れて逃げ帰ろうとすると、その妻のイザナミは、「私に恥を見せた」と言って、ただちにヨモツシコメ（黄泉の醜女）を遣わして追わせた。そこでイザナギは、黒い蔓草の髪飾りを取って投げ捨てると、たちまち葡萄の実になった。〔ヨモツシコメが〕これを拾って食べている間に逃げていったが、なお追ってくるので、右のミズラにさしていた大きな櫛の歯を折って投げ捨てると、たちまち、タケノコになって生えた。〔ヨモツシコメが〕これを抜いて食べている間に逃げていった。しばらくしてから、次には、先ほど生まれた八柱の雷神に、千五百の黄泉の軍勢をつけて追わせた。そこで〔イザナギは〕、はいていたトツカノツルギ（長剣）を抜いて、後ろ手に振りながら逃げてくるのを、なお追って、ヨモツヒラ坂（黄泉の急な坂）の坂本に至ったとき、その坂本にある桃の実三箇を取って、待ち迎えて撃ちつけると、ことごとく逃げ帰った。そこでイザナギがその桃の実におっしゃるには、「お前が私を助けたように、葦原中国のあらゆる人々が、苦しい運命に落ちてうれしい悩むときには、助けるのだぞ」とおっしゃって、名前を賜わって、オフカムヅミ（語義未詳）のミコトといった。

3. 最後に、〔イザナギの〕妻のイザナミが、みずから追ってきた。そこで〔イザナギは〕千人もかかって引くような大岩をヨモツヒラ坂に引いてきて遮り、その石を中に置いて二人は向かい立って、離別を言い渡したときに、イザナミが言うには、「いとしいわが夫のミコトよ、あなたがそうするのなら、あなたの国の国民を一日に千人殺しましょう」と言った。そこでイザナギがおっしゃるには、「いとしいわが妻のミコトよ、あなたがそうするのなら、私は一日に千五百の産屋を建てましょう」とおっしゃった。ここをもって、一日にかならず千人死に、一日にかならず千五百人生まれるのである。この故に、イザナミを名づけてヨモツオホカミ（黄泉の大神）という、また、追ってきたことをもって、チシキのオホカミ（道を塞ぐ大神）と名づけたという。また、かの黄泉の坂を塞いだ石は、ミチカヘシのオホカミ（道から追い返した

大神)と名づけ、またサカリマスヨミドのオホカミ(お塞ぎになる黄泉の戸の大神)ともいう。そして、ここでいわれるヨモツヒラ坂は、今は出雲国のイブヤ坂という。

## フロイト心理学にもとづく分析

北山修は、この物語について、次のように分析する。

この男神は、死んだ母神の自然な生産性にたいして「この世に帰ってくれ」という欲求と、死んだ母神の自然な醜い姿にたいする恐怖の両方を向けている。見るなの禁止を破ってその自然な二面性の苦痛を経験し、それを隔離した後に、「醜い、汚い国へ行ってきたものだ」というイザナギはミソギをして、アマテラス、ツクヨミ、スサノヲの三貴神を生んで、国土の分治を委任する。<sup>[2]</sup>

このように、〈この国〉の住人は、女性や母神の生産性と光明性にたいしては絶対的な愛情を抱いているが、それと対立する母神の死や不浄性にたいしては前論理的な拒否感情を向けているようである。そして、その絶対拒否の感情を処理しきれないとき、その対象である母神は〈この国〉から隔離される。これが、〈この国〉の特徴であるが、〈この国〉そのものは母胎から生まれた子どもであり、〈この国〉の動きは〈この国〉の人々の小児心性を反映するものであろう。つまり、母性の矛盾する二面性に向けられた古い記憶としてのアンビヴァレントな気持ちが、イザナギのイザナミについての態度に反映されているのである。<sup>[3]</sup>

私たちの親子関係の記憶が、神話の〈この国〉の人々の動きに反映されているとすれば、母神の姿に私たちの母に対する割り切れないどっちつかずの気持ちが描かれているはずである。とくに、母の二面性に直面したときの「汚い」「醜い」などの苦痛が、その隔離という機制によって〈この国〉を防衛して、回避されているのである。<sup>[4]</sup>

筆者は個人の歴史を描いたものとして、日本の昔話の異類婚姻説話をとらえなおしている。そこには、イザナギの体験のように、対象の醜い側面に直面して、妻を妻とは思えないという過程が描かれており、〈母の国〉から来た母を母と思えないというこの問題を現代的なものとしても再検討することができる。つまり、これらの物語は、現代の「親を親と思えない子どもたち」の育ちの問題を考えるためのヒントを与えてくれるかもしれないのである。<sup>[5]</sup>

## アドラー心理学にもとづく分析

エピソードは一般にいくつかの場面(これを以下『シーン scene』という)から構成されており、各々のシーンの中核はスナップショットのような固定した画面であり、それらを、ちょうど紙芝居のように、順次に言語的に説明したものであると考えられる。今回とりあげたテキストは、すくなくとも3つのシーンに分けられるように思うので、テキストに1~3の番号を付しておいた。ここでは北山も重視しているシーン1を中心に分析する。

まず、テキストの中から「最も印象的な部分」を選び出す。早期回想の場合は対象者に尋ねるのであるが、物語では話者に尋ねるわけにはゆかないので、テキストの中から、外界の出来事を

意見を交えずに説明している文をみつけだして（これを以下『エピソード事態 episodic event』あるいは単に『事態 event』という）、それが最も印象的な部分であると考えことにする。シーン1では「[イザナミは] ウジがたかっとうごめき」というくだりが外界の出来事に忠実に対応しているので、これがエピソード事態である。話者は、この部分のイメージをスナップショットとして表象しつつ、このシーンを語ったのだと思われる。

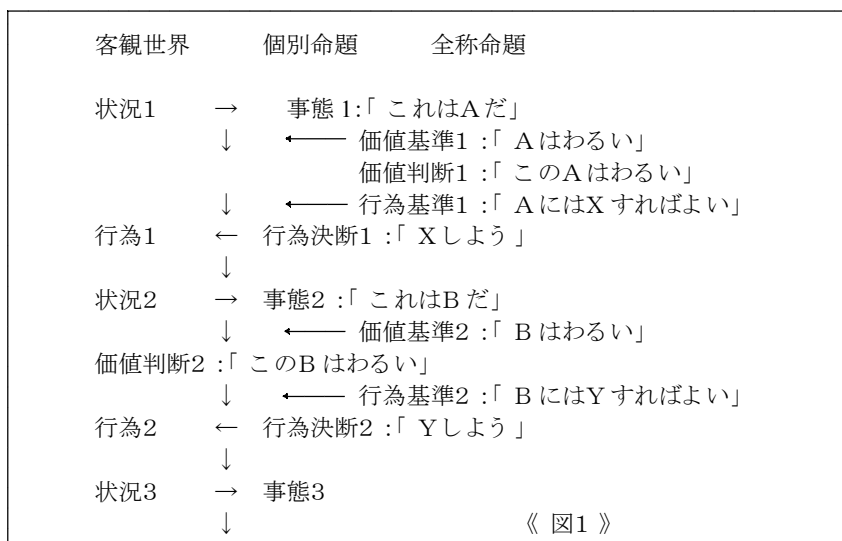
エピソード事態は、客観世界のある状況から切り出されたものである。すなわち、客観世界に『イザナミにウジがたかっとうごめいている』ということを含む状況があって、それを言語的に「ウジがたかっとうごめき」という文でもって説明したものである。そのような客観的状況は、その前に主人公あるいは相手役のある行為があって、その結果として引き起こされたものであろうし、またその後には主人公あるいは相手役のある行為を引き起こすであろう。

人は、ある状況に出会って、「この状況は《わるい》」と否定的に価値判断したとき、それを《よい》状況に変えるために、行為するのである。アドラーがいうように、「相対的マイナスから相対的プラスに向って」行為するのである。すなわち、1) 『状況 Situation』に出会うと、2) それを『エピソード事態 episodic event』として言語化して記述し、3) それに《よい》か《わるい》かの『価値判断 evaluation』を加え、4) 価値判断が《わるい》とき、それを《よい》方向に変えるための『行為決断 decision』をし、5) それを『行為 action』として実行する、という段階を経て、外界に向かって行為を通じて働きかけるのである。

その際に人は、事態を《よい》か《わるい》か判断するための内的な価値基準を参照するであろうし、《わるい》と判断したときに、どのような行為をおこなえばそれが《よい》方に向かうかの内的な行為基準をも参照するであろう。これらの価値基準や行為基準は、「一般にAはBである」という形をした全称命題の形をしている。これに対して、エピソード事態や価値判断や行為決断は、「このAはBである」という形の個別命題の形をしている。

全体の論理の流れを図示すると、図1のようになる。

さて、テキストにもどって、論理の流れを追ってみよう。「[イザナミは] ウジがたかっとうごめき」という客観的状況がおこる前には、誰がどのような行為をしたであろうか。テキストから読みとれるのは、「左のミズラにさしていた大きな櫛の端の太い歯を取り折って、小さな火をともして[宮殿の]中を覗き見する」というイザナギの行為である。ではなぜイザナギは宮殿の中を覗き見することを決断したのであるだろうか。テキストは、「[イザナミが] 宮殿の内に戻って行って

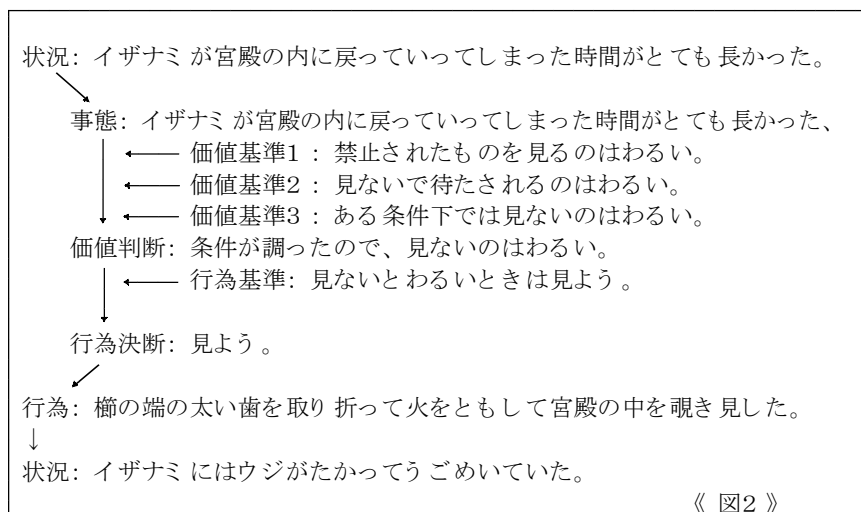


しまった時間がとても長かったので、[イザナギは] 待つことができなかつた」と説明している。ところが、宮殿の中を見ることは、その前にイザナミから、「しばらく黄泉国の神と交渉してみます。[その間] 私をご覧になりませんように」といって禁止されているのである。このとき、イザナギの中には、一方には「見るなと禁止されたものを見るのは《わるい》」という価値基準があり、他方には「見たいものを見ることができないで待たされるのは《わるい》」という価値基準がある。はじめは前者の価値基準にもとづいて「見ないでおく」という決断がなされていたが、やがて後者の価値基準にもとづいて「見る」という決断がなされるのである。

すこし余談になるが、二つの価値基準が併存するときのアドラー心理学の考え方を説明しておく。「禁止されたものを見るのは《わるい》」という価値基準は、相手役であるイザナミとの間の契約にかかわっていて共通論理 **common logic** であり、「見ることができないで待たされるのは《わるい》」という価値基準は、イザナギの個人的な関心にだけ根ざした私的論理 **private logic** である。共同体的な価値基準を押しつけて私的な価値基準を採用するためには、それを正当化するためになんらかの言い訳が必要である。すなわち、「見るなと禁止されている場合にも、ある条件がととのえば、見ても《よい》」という価値基準が別にあつて、その「ある条件」が整つたと判断するのである。その条件は、それによって自己や他者を説得できるものでなければならない。その条件について、テキストはただ「[イザナミが] 宮殿の内に戻っていつてしまった時間がとても長かつたので」と客観的な状況を書いているだけであるが、もう少し内的な理由がほしい気がする。たとえば「相手のことが心配だから」とか、「これ以上待つのはつらいから」とかいうようなものである。このような理由を思いつくと、禁止されたものを見てもいい条件が整つたと、人は感じるのである。

共通論理と私的論理とが対立するとき、私的論理を優先することを正当化するために持ち出される理由のことを、アドラーは、人生の嘘 **Lebenslüge** あるいは自己欺瞞 **self deception** とよんだ。「相手のことが心配だから」というのも「これ以上待つのはつらいから」というのも、自己欺瞞的な口実である。前者は、相手への配慮を含んでいるので共通論理に近く、後者は自己にのみ関心があつて私的論理に近いので、前者の方が後者よりは健全であるかのようにみえるし、実際そういう場合もあるかもしれない。しかし、場合によっては、むしろ前者の方が反共同体的な破壊的な行為を正当化する口実になりうることもある。そこで、両者を区別せずに、自己欺瞞であると規定しておくのである。

ここまでの様子を図2に図示する。



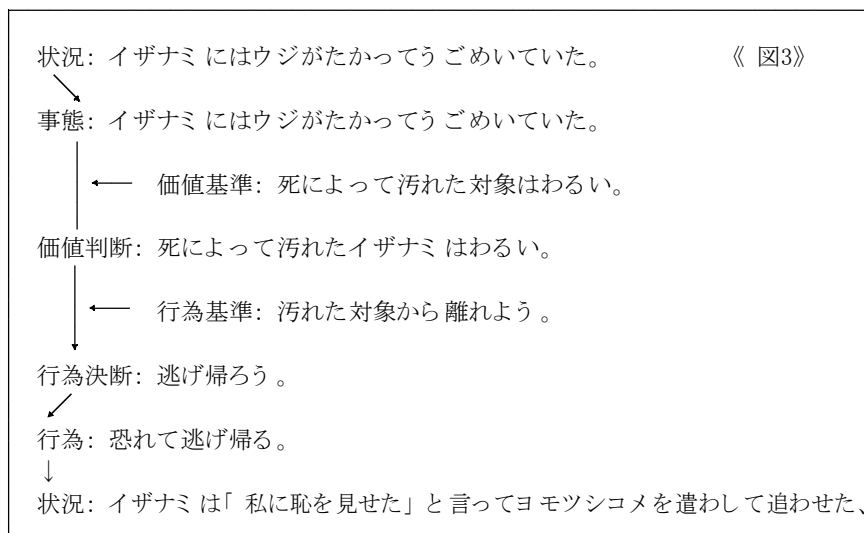
次に、「[イザナミは] ウジがたかってうごめき」というエピソードの結果はどうなっ  
てゆくか。「[イザナギは] 恐れて逃げ帰ろうとする」というのがこれに続くイザナギの行為であ  
る。ウジがたかってうごめいている妻をイザナギは「恐れた」のであるが、イザナミは本来は「い  
としいわが妻のミコト」であったわけで、それが恐るべき存在に変化したのは、テキストは明示  
的には語っていないが、死によって汚れているからであろう。すなわち、「たとえ愛する対象で  
あっても、死によって汚れた状態にあるすべての対象は《わるい》」という価値基準があると推  
量される。それにもとづいて、イザナギは「死によって汚れた妻は《わるい》」と判断したので  
ある。そこでイザナギは「逃げる」という行為を決断するのである。これは、「汚れた対象から  
は離れよう」という行為基準があるからであろうと推量される。

「逃げる」というイザナギの行為によって引き起こされる状況は、イザナミが「私に恥を見せ  
た」と言って怒り、「ただちにヨモツシコメ（黄泉の醜女）を遣わして [イザナギを] 追わせた」  
という出来事である。ここでシーン1からシーン2に物語は移ってゆく。  
ここまでの様子を図3に図示する。

ここまでの分析結果は二つの項目にまとめることができるように思う。ひとつは、「相手に見  
るなど禁止されていても、ある条件下では見てもよい」ということである。「ある条件」という  
のがなんであるのかは、テキストには明示的には書かれていないが、たとえば「相手のことが心  
配である」とか、「待つつらさに負けてしまう」とかいうようなことである、

いまひとつは、「たとえ愛する相手であっても、死んでしまえばけっして近づいてはならない」  
ということである。私には、こちらの方が話者が語りたことであるように思われる。古代人は、  
現代人には想像もつかないほど死の汚れをおそれたようで、この物語の最大のメッセージは、そ  
れについての警告なのであろう。

アドラー心理学のエピソード分析の方法は、ある事態や判断や決断などの個別命題から、それ  
に続く個別命題が導き出せるためには、どのような全称命題が要請されるかを明らかにすること  
である。このように分析すると、個々の個別命題の間を論理的に関連づけている価値基準や行為  
基準などの、さまざまな『法則』があきらかになってくる。この法則を、個人の場合にはライフ  
スタイルとよび、集団の場合には文化とよぶ。



## 分析方法の比較

### <テキスト分析 || プロット分析>

北山は、テキストそのものを扱わずに、物語を彼なりに要約してプロットを取り出し、それを分析している。それに対して私は、テキストに明示的に書かれている言葉をそのまま扱いつつ、テキストに書かれていない文を推量しておぎなうことで、論理の流れを明確にしようとする。これがフロイト心理学とアドラー心理学のエピソード分析法の第一の違いである。

アドラー心理学がテキストをこのように重視するのは、分析者のライフスタイルの混入をできるかぎり避けるためである。テキストからプロットを要約する時点で、すでに分析者のライフスタイルが混入するおそれがある。これは物語分析だけではなく、早期回想分析や夢分析でも同様に、対象者から得られたテキストを要約してから分析してはならない。さらに、早期回想や夢だけではなく、面接の中での対象者の言葉はなんであれ、要約せずに、それそのままを考察の対象とすべきである。さもなければ、対象者のライフスタイルを分析しているのか分析者自身のライフスタイルを分析しているのかがわからなくなってしまう。

### <文脈分析 || 文分析>

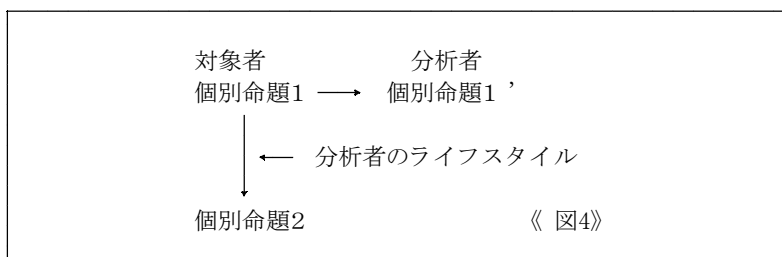
アドラー心理学のエピソード分析では、いつでもテキストから二つの連続する個別命題を取り出して、その間の論理的な連関、すなわち文脈 **context** が、いかなる全称命題を媒介とすれば可能となるかを考える。一つだけの個別命題を取り出して、その『意味』を考えることはしない。『意味』は常にテキストとテキストの間、コンテキストの中にあるのである。

もし一つだけの個別命題を取り出して、その『意味』を議論しようとする、どんなことがおこるであろうか。その個別命題に関連して起こる分析者の中の個別命題があるはずである。その二つの間をつなぐのは、分析者の側の全称命題である。そうすると、ここに、図4のように、分析者のライフスタイルが混入するのである。

北山はしばしば、ひとつの個別命題を文脈から孤立させて扱っている。たとえば、「対象の醜い側面に直面して、妻を妻とは思えないという過程」と彼がいうとき、「対象の醜い側面に直面して」という部分は「[イザナミは] ウジがたかってうごめき」というテキストの中の文に対応しており、「妻を妻とは思えない」という部分はテキストのどこにも対応していない。すなわち、後者は分析者である北山の判断であって、テキストの話者の判断ではないかもしれない。

また、アドラー心理学のエピソード分析では、テキストで離れた部分にある二つの個別命題を結びつけて解釈することにも、きわめて慎重である。二つを取り出す際に、分析者のライフスタイルが混入する可能性が高いからである。

ところが北山は、テキストでは離れた部分に書かれている文を恣意的に関連づけて分析することがある。たとえば、「この男神は、死んだ母神の自然な生産性にたいして『この世に帰ってくれ』という欲求と、死んだ母神の自然な醜い姿にたいする恐怖の両方を向けている」と彼がいう



とき、『この世に帰ってくれ』という欲求」の方はテキストの「イザナギが語っておっしゃるには、『いとしいわが妻のミコトよ、私とお前とが作っている国は、まだ作りおえていない。だから、帰ろうではないか』とおっしゃった」という文に対応しており、「醜い姿にたいする恐怖」の方は「[イザナミは] ウジがたかってうごめき」から「そこでイザナギは、見て恐れて逃げ帰ろうとする」にかけての文に対応している。テキストの中ではこの両者ははるかに離れており、どれだけの内的関連があるのかわからない。北山が指摘するような葛藤があるのかもしれないが、ないのかもしれない。

北山は、この部分から、女性や母神の「生産性と光明性への絶対的な愛情」と「死や不浄性への前論理的な拒否感情」とのアンビヴァレンスを導き出す。しかし、イザナギがイザナミにたいして愛情を抱き、「この世に帰ってくれ」と願っていた時点では、イザナミはまだ醜い姿をしておらず、したがってイザナギにはイザナミへの拒否感情はない。イザナミの醜い姿を見て恐怖を覚えた時点では、もはや愛情は感じられず、ただ恐怖や拒否感情だけがある。北山は、これらふたつの感情が同居しているかのような解釈をするが、テキストを素直に読むと、そうは思えない。むしろ、愛するイザナミの死体であっても、死体になってしまえば死の汚れへの恐れしか感じないというところに、現代のわれわれとは違った古代人の心性を読み取るべきではないか。

#### <個性記述性 || 法則定立性>

北山は、この物語を『鶴の恩返し』などの異類婚姻説話と関係づけて分析してみたり、あるいは、「母神の姿に私たちの母に対する割り切れないどっちつかずの気持ちが描かれているはずである」とか、「これらの物語は、現代の『親を親と思えない子どもたち』の育ちの問題を考えるためのヒントを与えてくれるかもしれないのである」とか言って、現代社会の状況と関係づけてみたりする。このように、北山の分析態度は法則定立的 *nomothetic* であって、人類一般になりつつ法則性をエピソードから抽出しようとする。そこで、他の物語との比較も正当化されるのである。しかし、それは結局のところ分析者のライフスタイルの分析に陥って、対象者についても人類一般についても何も知らないままで終わってしまう危険をはらんでいる。

これに対して私は、このテキストは『古事記』の話者に固有のライフスタイルを反映しているものであって、他の説話の話者や現代人の誰かと関連づけることにはなにも意味がないと考える。アドラー心理学の分析態度は個性記述的 *idiographic* であって、対象者が他者とはどう違っているのか、どういう私的論理をもっているのかに関心をもつ。「人はそもそも」というような命題を発見しても、それが個別の対象者への援助に役に立つとは考えられず、それよりも「この人は」ということを知るべきであると思うのである。

#### <論理学 || 自由連想>

北山自身が、「筆者の思いつきの自由連想と精神分析の発達理論で物語の分析を大ざっぱに進行させている」<sup>[6]</sup>と述べているが、彼は、テキストをまるでロールシャッハテストの刺激図形のように使って、自由連想、を繰り広げてゆくのである。しかし、これはきわめて危険な分析態度である。たとえば、フロイト派の発達理論がテキストのあちこちに見えてきたからといって、テキストの中にそれが書かれていたことにはならない。ロールシャッハ図形の中にコウモリもサルも描かれていないのと同じことである。北山が分析しているのは、対象者である『古事記』の話者のライフスタイルではなく、北山自身のライフスタイルである可能性がきわめて高い。

物語分析であるからこれでも問題はないのかもしれないが、現実の臨床場面で患者から得られた材料をもとに同じことをしたとすればどうであろうか。治療者は患者をまったく知ることができないので、患者も患者自身を知ることができない。そうなれば、治療者は患者を援助すること



ができない。このあたりがフロイト心理学がかかえている最大の困難であろう。

アドラー心理学のエピソード分析は、論理的・言語学的な態度を慎重に保って、分析者の連想の暴走を防止することで成り立っている。それは、フロイト心理学の分析のように文学的でもなければ深遠でもないが、事実にも即してもおり、患者への援助に適してもいると考えられる。臨床の場でエピソードを分析するのは、治療者が患者を理解し、患者が患者自身を理解するのを援助するためである。そのためには、治療者は、エピソード分析の中に自分のライフスタイルが混入することをあらゆる手をつくして避けなければならない。

## まとめ

『古事記』の中の物語をとりあげて、北山修によるフロイト心理学的分析と、私のアドラー心理学的分析の方法を紹介し、さらに両者を比較した。アドラー心理学的分析は、分析者のライフスタイルの混入を可能な限り避けることができるため、対象者の援助により有効であると考えられる。

## 引用文献

- [1] 倉野憲司校注『古事記』岩波文庫.
- [2] 北山修『悲劇の発生論』金剛出版, p.33.
- [3] 前掲書[2], PP.34-35.
- [4] 前掲書[2], P.35.
- [5] 前掲書[2], P.50.
- [6] 前掲書[2], P.39.

## 更新履歴

2012年9月1日 アドレリアン掲載号より転載